

目次

- 1, プロジェクト立案について
- 2, 活動準備
- 3, 現地活動
- 4, 活動を振り返って



<活動地域>

セネガル国ルーガ県
ケベメル市ガラ地区
(首都より約145km)



ミシンの台数が足りないので、
アイロンがけを手伝う研修生



女性グループ リーダーの二人
Ramatouraay Seckさん(左:代表)
Khady Fallさん (右:副代表)

1、プロジェクト立案について

活動地のケベメルは町として商業が盛んだが、畑を持たずに小売業に従事する人々も多く、出稼ぎによる男性の人口流出がある地域といえる。農村部に比べると生活は安定しているが、資本をもたない女性は小売業にも従事しにくい。また、小学校に落第制度があったり、家事を手伝う子どもが必要とされたりして、初等教育を十分受けられず、文字の読み書きできない女性もいる。

申請者は、2004年から2006年に初代の村落開発普及員としてセネガル国ケベメル市に派遣され、女性グループの立ち上げから端切れによる縫製訓練、商品開発、隊員間協力による商品開発コンテストなどの協力活動を行った。

二代目の協力隊員が販路開拓及び質管理や運営支援を行った。また、商業グループとして正式登録し、「G.I.E JIGEEN NU FARLU」(現地のウォロフ語：仕事にやる気あふれる女性たち)として再スタートを切った。

2008年に二代目の村落協力隊員が現地を去ってからは、女性たちが、首都の土産物屋などに商品を販売し、自分たちで活動を続けていた。

2009年の夏からは、申請者の紹介で、日本のセネガル支援任意団体、「バオバブの会」のフェアトレード商品として会のバザーで販売し始めた。また、2010年7月からは、横浜市中区のフェアトレードショップHAYA-HAYにも商品を置いてもらっている。

バオバブの会への販売が定期的に見込めるようになった2010年2月に、女性たちから「新しく学びに来る若い女性たちがいる」という相談を持ちかけられた。女性グループの活動を知人から聞きつけて、縫製訓練を受けたいと若い女性たちが集まってきたのだ。女性グループのリーダーは、縫製訓練を行いたい、十分な設備と資金がなく、訓練施設としての研修はできないが、カバン製作の一部を手伝ってもらっていた。

今回のプロジェクト立案は「Jigeen Nu Farlu」と、新たに学ぶ意欲のある女性たちにとって、研修が可能となるように、また持続的に縫製技術が伝承されていくことを期待して、計画・実施されることとなった。

2、活動準備

女性グループリーダーと具体的な支援協力活動について電話で話し合ったところ、ミシン購入という設備支援が最優先とされることがわかった。現地との通信は、電話と手紙のやりとりになるが、電話とウォロフ語会話が困難であり、手紙は2週間を要することから、活発な意見交換は難航していた。

しかし、2010年7月頃から現地の青年海外協力隊隊員の協力を得て、

電子メールを使いながら女性たちとの連絡調整をすることになった。確実な現地との連絡調整により、事業の下準備を進め、滞在6日間で効率よくミシン購入や配送を進められた。焦らず、押し付けず、女性たちのペースに合わせて、活動を進められたと感じている。

3、現地活動

<活動日程>

- 12月24日 深夜 日本出国
- 12月25日 ダカール到着
- 12月26日 ダカールにて機材購入
ケベメールへ移動
- 12月27日 女性グループと新規研修
内容について打合せ
- 12月28日 新規研修の登録制度に
ついて打合せ
商品開発会議
- 12月29日 ミシン組み立て
研修生申し込み登録
- 12月30日 会計・運営会議
- 12月31日 ダカールへ移動 出国
1月2日 日本到着



首都ダカールのミシン店にて値段交渉中



購入したミシンやミシン台などの機材



初めてミシンのペダルを踏んで喜ぶ研修生



購入したミシンには「THE SUPPORTING ORGANIZATION OF JOCV」と記した

機材購入

活動地であるケベメールでは、ミシンの購入ができず、手に入っても知人をつてに中古ミシンを譲ってもらうことになるため、首都ダカールで購入し、ケベメールまで運ぶことになった。ダカールで女性グループの副リーダーの知人と共に購入した。

女性たちの希望では、1台の価格を抑えて、研修生が多く学べるよう台数を確保してほしいということであった。よって、新品の足踏みミシンを4台と、電動のジグザグ縫いができるロックミシン1台を購入した。足踏みミシンは電動ミシンの三分の一程度で購入でき、停電が起きても活動ができる。足踏みミシンは故障が少なく、万が一故障した場合も、ケベメール市内の鍛冶屋で修理が可能である。その点、電動ミシンは縫いが美しく、作業は早いのだが、コードや配線が切れたり、故障したりした場合の部品の取り寄せが、非常に困難となる。今回購入した電動ミシンが故障した場合は、ダカールの購入先で修理が可能であることを確認済みである。また、作業場の広さを考慮して、購入を計5台とした。

ミシン設置

到着後、鍛冶屋にミシン5台を組み立ててもらい、女性グループのメンバーが動作確認をした後、研修生たちのペダル練習が始まった。これまで手縫いのタグ付けや、仕上げのアイロンがけなど、ミシン作業を伴わない手伝いばかりをしてきていたこともあり、椅子に座ってペダルを踏んだ時の研修生たちの笑顔は素晴らしいものだった。「今日、本当に初めてペダルを踏んだの！」と興奮気味に研修生同士、声をかけ合っとても喜んでいた。

組み立てたミシンには、「THE SUPPORTING ORGANIZATION OF JOCV」と記したシールを貼り、日本の支援で提供された機材であることを明記した。

ミシンを5台設置したことで、作業場は狭くなり、女性たちは「資金を貯めて広い場所へ移りたい。」と話していた。ミシン増設が現実となり、今後の活動についてさらに意欲が高まったように思われた。



ミシンの機材を車へ積み込む様子。あまりにも機材が多いため、座席にも積み込み、道中警察に罰金を払うというハプニングがあった。



G.I.E JIGEEN NU FARLUの最年少メンバー(未登録)。メンバーの中には子どもを連れて作業をしている女性もいる。



運営会議の様子



登録用紙記入中 綴りを教えてもらっている



これで一安心、笑顔で記入



登録用紙の代筆をしてもらっている

運営会議

女性グループ G.I.E JIGEEN NU FARLU のメンバーと今後の研修について運営会議を行った。創業メンバーである 6 名は執行部とし、これ以上の執行部メンバー増員はしないことに決まった。研修生は 6 ヶ月の研修期間とし、研修後は希望があれば、グループの作業場で仕事を続けることができる。研修生は登録費 2000 CFA、一月ごとに 1000 CFA の受講料を支払う。ケベメール市内には女性用の公立研修施設があり、一月 2000 CFA 程度で 3 年間、染色、食品加工、洋裁、識字などが学べる。しかし、研修後の就労先が確約されるわけではなく、研修が直接的に就労や所得向上へ繋がっているとは言えない。その点では、この女性グループの行う研修は、短期間で、収入の機会が期待されるより直接的なものといえる。販売については、執行部メンバーは自分の商品が売れた場合、10% をグループ会計に納めている。研修生は研修終了後、材料をグループから提供され商品を製作し、自らの 50% をグループ会計に納める。材料を購入する資金を持たない若い女性たちが、すぐに仕事を始められるようにと、このような仕組みにした。

研修生登録

今回は 7 名が研修を受けることになった。ミシンの台数や、講師となる執行部メンバーが 6 名ということも考慮した。プロジェクト立案時は、執行部女性が研修生を「ハレイ」と称しており、ウォロフ語で子ども、もしくは若い女性をさすので、プロジェクト名を「思春期女性」としたが、実際は 15 歳から 38 歳までの広範囲に及んでいることがわかった。研修を受けに来る女性

たち自身も、研修の登録用紙を目の前にしてから、「私って何歳なの」と改めて自分の年齢について身分証明書で確認するという状況であった。現地の協力隊員と連携して事前準備をしてきたが、やはり言語・文化の異なる地域での活動においては、現場での直接的なニーズ調査が必要であることを実感させられた。

よって、プロジェクト名にはこだわらず、希望する女性をミシンが使用できる研修生として受け入れることにした。

登録用紙には、月ごとの研修費支払いと、研修計画を一覧にした。(別添資料参照) 家事を任されている女性は、毎日研修に参加することが難しく、また家庭の事情(冠婚葬祭など)でケベメールを不在にすることも多いので、研修が中断されても、再開しやすいように一覧型の登録用紙にした。

研修生の中には、字の書ける女性に一字ずつ綴りを確認しながら自分の名前を記入したり、代筆を願い出たりする女性もいた。女性グループでは自分の作った商品の中に、製作者名・商品名・価格を書いたメモを入れることになっている。販売時にこのメモを確認して、各自の売り上げ分配をする。確実に分配を得るためには、識字は必ず必要となる。研修を通して、縫製技術だけでなく、識字についても意識が高まることを期待している。

研修生の名前と年齢

- ・Binta Ba 15 歳
- ・Nger Ndeye Awa 16 歳
- ・Dieynaba Sow 18 歳
- ・Medina Sow 22 歳
- ・Dieng Kafia 26 歳
- ・Aissata Ba 31 歳



ウォロフ語テキスト

創業メンバーの一人である Nday Samb さんは、2005 年の活動を開始時、アルファベットの読み書きができなかった。商品に入れるメモも、自分の子どもに書いてもらっていた。しかし、女性グループの制作・販売活動を通して、識字の必要性を感じ、2007 年から識字教室に通って、ウォロフ語での計算や読み書きができるようになったという。今回の訪問で最も嬉しかったニュースの一つである。



商品を販売した後、回収したメモはすべてノートに張って保存している



会計係2人が帳簿をあわせている



女性グループの会計簿



首都のみやげ物屋で販売されている類似品

今後の活動について

女性たちは今回の支援を受けて、自分たちの活動に対しさらなる意欲を持ったようである。手狭になった作業場を見て、「国道沿いにみんなの店を持ちたい」と次の夢を語る姿が印象的であった。会計係である二人のメンバーは、帳簿を別々につけ、定期的に点検しあっている。現在グループの所持金は14万CFAほどで、そこから材料や作業場の電気代・賃料を支払っている。女性たちは、研修生を迎えることで、地域貢献になるとともに、一定期間に安定した研修費を集められ、グループとしても利益となると考えている。同時に、研修所として確実に技術を提供することの責任についても意識が高まっている。

研修生を7名受け入れたことによ



類似品対策のグループ名ロゴ

り、商品生産量は増えると考えられ、さらなる販路確保が課題である。以前は首都のダカールやサンルイのみやげ物屋に卸していたが、類似品の出現や世界不況による観光客の減少などによりセネガル国内での販売は行き詰まりを見せている。類似品については、グループ名をロゴにしてタグを商品につけて差別化を図っている。しかしながら、小さなグループである上、セネガル内での宣伝力は皆無に等しく、現状としてはロゴをつけたことで実際に差別化が図られているかは判断が難しい。一方、セネガル国内の協力隊及びJICA関係者への販売や、アメリカ平和部隊の民芸展に出展するなど、他方面で販路確保の模索を続けている。

グループの女性たちの主たる仕事は、家事である。家事の合間に仕事ができることが、何よりの魅力である。メンバーの一人が「服の仕立てはデザインや刺繍など技術により価格が異なる。しかしカバンやポーチは、一度手順を覚えると、いくつでも同じ価格で生産・販売ができる。」と言っていた。技術の形式や時間のやりくりなど、あらゆるタイミングが女性たちの生活リズムに適合してこそ活動がスムーズに進むのだと感じている。

4、活動を振り返って



G.I.E JIGEEN NU FARLU のメンバーそれぞれ家庭での仕事があるため、全員での撮影とはならなかった。

今回の支援活動を通して、信頼関係を国際協力の基礎として協力を進めることの有用性を感じた。それは二年間を現地で過ごした帰国隊員だからこそできる国際協力の形であると考えられる。滞在期間が短期間にもかかわらず、女性たちと効率的な活動ができたことは、信頼関係ゆえである。大きな国際協力という流れの中で民と民でつながり、お互いに友として協力活動を進められる素晴らしさを感じた。女性グループのリーダーは、協力活動を終えた外国人は、帰国後さっぱりとセネガルのことを忘れてしまうものだが、帰国後も日本と繋がっていられることに感謝している、と話してくれた。また、自分たちで活動を始めてからの生活は、自分の生活諸費用を人に金の無心をせずに暮らせている、嬉しく思う、とも話してくれた。

研修生用の裁縫道具を寄付してくれた知人たちには、女性たちから感謝の手紙と写真が送られ、民と民をつなぐ相互理解が、協力隊隊員とは別の輪として広がったように感じている。

報告活動としては、2011年2月11日(金)、12日(土)にJICA横浜で行なわれる“よこはま国際協力フォーラム2011”で神奈川県青年海外協力隊OB会から今回の活動内容について発表を予定している。